OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大腸癌予防に向けた食事脂肪の最適摂取に関する研究
Author(s)	中村, 富予
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54244
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【8】

氏名	中村富予（なかむらとみよ）
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学位記番号	第　２３７０８　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	大腸癌予防に向けた食事脂肪の最適摂取に関する研究
論文審査委員	（主査） 教授　松浦　成昭 （副査） 教授　山村　卓　　教授　三善　英知

論文内容の要旨

日本では、大腸癌の罹患率が増加しており、その原因として食生活の西洋化による脂肪摂取量の増加が指摘されてきた。

本研究の目的は、脂肪のエネルギー割合を２０％に適正化する食事指導が大腸腫瘍（癌および前癌病変である腺腫）発生に及ぼす影響を検討することである。大腸癌予防のための無作為割付臨床試験の参加者373名を対象とした。食事調査は連続3日間食事記録法を用い、その結果をもとに脂肪のエネルギー割合が18～22%になるように指導した。ベースライン時と食事介入後のデータを用いて、4年目の大腸内視鏡検査における大腸腫瘍発生の有無をエンドポイントとするコホート解析を行った。

脂肪のエネルギー割合を減少した人ほど大腸腫瘍発生のリスクが高くなった。男性において、介入後の脂肪のエネルギー割合が23.8%～26.4%の群で

最も腫瘍発生が少なく、体重あたりのリノール酸を多く摂取するほど、腫瘍発生のリスクは有意に低下した。女性でも同様の傾向を示した。

この結果より、強力な脂肪制限は、大腸腫瘍の発生を促進する可能性が高く原因としてリノール酸などの脂質栄養素の不十分な摂取が考えられた。

論文審査の結果の要旨

日本では、大腸癌の罹患率が増加しており、その原因として食生活の西洋化による脂肪摂取量の増加が指摘されてきた。その観点から脂肪摂取を制限することによる大腸癌の予防が提唱されている。申請者は、脂肪エネルギー割合を２０％に適正化する食事指導が大腸腫瘍（癌および前癌病変である腺腫）発生に及ぼす影響を検討した。大腸癌予防のための無作為割付臨床試験の参加者373名を対象とし、連続3日間食事記録法による食事調査を行い、その結果をもとに脂肪のエネルギー割合が18～22%になるように指導した。ベースライン時と食事介入後のデータを用いて、4年目の大腸内視鏡検査における大腸腫瘍発生の有無をエンドポイントとするコホート解析を行った。その結果予想とは異なり、脂肪のエネルギー割合の減少した人ほど大腸腫瘍発生のリスクが高くなった。男性において、介入後の脂肪のエネルギー割合が23.8%～26.4%の群で最も腫瘍発生が少なく、体重あたりのリノール酸を多く摂取するほど、腫瘍発生は有意に低下した。女性でも同様の傾向を示した。この結果から、強力な脂肪制限は、大腸腫瘍の発生を促進する可能性が高く、脂質の量のみではなく、リノール酸などの脂質栄養素の内容も考慮した食事指導の必要性が考えられた。本論文は大腸癌予防の食事指導に重要な指針を示したものとして高く評価できる。以上より、本論文は博士（保健学）の学位授与に値するものと考えられる。